
やるときゃ、やります！！

みみずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やるとさや、やります！！

【著者名】

N4955BA

【作者名】

みみずく

【あらすじ】

剣と魔法がある世界が舞台。魔法書店の店主の下で暮らすラスマア。ある日、学校の帰りに怪しげな男たちに追いかけられる女の子を保護した。連れて帰つてびっくりなのは、その子の正体が王女様。ついでに命を狙われていて、その護衛を保護者が頼まればらしい。

それはいいけど、自分はのけ者にされるの可能性高いよね、とずれた感想を持ったラスマアは、王女様の護衛に加えてもらえるのでしょうか。

「…以上だ。今日はこれまで」

教師の口から本日の終了を告げられると、教室内はそれまでの静寂が嘘のように賑やかになつた。帰宅を口にする者、そのままおしゃべりを始める者。静かに話を聞いていた分、開放された学生たちの口は軽くなる。

そんな級友に混じつてラスアも帰り支度を済ませると、友人たちに別れを告げた。

「ラスア」

教室を出ようとしたら、そこでよく知った声が彼女を呼び止めた。振り返ると級友の男子が笑いながら歩み寄ってくる。

太陽のように明るい金の髪、髪と同じ色の瞳は力強く輝いている。性格も太陽のように明るく、その笑顔は周囲を惹きつける不思議な魅力を持ち彼は学年を問わず慕われ、教師たちからも気に入られていた。

「もう帰るのか？」

「うん。ショーラクは？」

「これ

ショーラクが右手を伸ばして軽く上下に振った。

「ああ、そういえば校庭を借りてやつてるんだっけ?」

「ああ。だけど正直なところサボりたい。俺には性に合っていないんだよなあ」

剣を振る仕草を見てラスアが納得すると、シェラクがぼやいた。
自衛のため武器を携帯するのが一般的なコツズウェイーン国では、
学校で学生たちに基本的な武器の扱い方を教えている。

二人が通うウルドット高等学校にも武術の授業はあるが、それは物足りない学生たちが集まり放課後教師が一緒にすることを条件に、自主訓練をしていた。シェラクは彼を気に入った先輩に無理やり引きずり込まれ、断りきれずに苦手な剣を振るつているのだ。

彼が参加しているということでその自主訓練に参加する学生の数は男女問わず倍近く増えた。それだけでなく毎回見物人もいるという。それを聞いた時ラスアは彼の人気振りに思わず呆れてしまった。

そんな人気者であるシェラクとは違うラスアはそれほど目立つほうではない。白銀の髪と髪より少し濃い銀の瞳。まっすぐな髪は腰まであり無造作に一くくりにしている。どちらかといえば美人といえるが、騒がれるほどでもない、どこにでもいるような少女だ。

それに、彼女はいつも授業が終わるとすぐに帰ってしまう。自主練に参加することもなかつた。接点と言えば同じクラスだといつことくらいだ。

それでも一人が一緒にいる様子はよく目撃されている。授業中や休み時間などともに行動することが多かつた。

入学当初にたまたま主席が隣になり、馬があつたというのがきっかけだ。それ以来一年に進級しても変わらない友人関係を築いていた。

「でも身につけて悪いものでもないでしょ?嗜みよ、嗜み」「嗜みでの訓練はないと思うぞ……。下手な剣術の訓練よりよっぽどきつい

「いいんじゃない?しつかり体に叩き込まれて」

「お前はあれを見たことないからそんな風にいえるんだ。…今度連れてってやるよ。一回見ればそんな風に笑えないぞ」

恨めしそうに見てくるシーラクを彼女は可笑しそうに笑った。どちらほど人気があるヒシリラクも同級生の少年たちと変わらないとラスアは思っている。

「本当? 楽しみにしてる? 、まあ、そろそろ行くわ」

ふと見上げた時計の針が思つたより進んでいてラスアは慌てた。

「ああ、じゃまた明日な」
「ん、また明日」

軽く手を振つて別れを告げると、ラスアは急いで教室を出る。駆け足で廊下を抜けるラスアの姿はあつとこつ間に小さくなつて見えなくなつた。

ラスアの住む学術都市アジェンダは学術の都として発展をしてきたコッズウイーン国でも指折りの大都市だ。大小さまざまな学院、学校が集まるベリエ地区、様々な研究機関が集まるチケ地区、書物の宝庫の別名を持つカシュガーン地区の三区からなるこの街には高い知識の向上を求めて数多くの人々が集まる。

その中でも書物の宝庫の別名を持つカシュガーン地区には、古くから多くの書店が軒を連ね、古今東西国内外種類を問わず様々な本が集まつてくる。書店も一般的な書物を扱っている店から一つの物だけを扱う専門店まであり、カシュガーンに来れば必ず欲しい本が見つかるといわれている。カシュガーンはコッズウイーン国だけでなく周辺の国々の中でも最も本が集まる場所として国外から訪れる者も多い。

ベリエ地区のケナ駅から定期馬車に乗ったラスアは三駅先にある力シユガーン地区のダリム駅で下車した。

「まづずーい。やつぱり遅くなつたわ」

馬車を飛び下りたラスアは、溢れかえる人の間を縫うように駆け足で進んだ。器用なもので、走っていても誰ともぶつからない。通い慣れた十字路をひょい、と曲がる。足を踏み入れた先は、商店が並ぶ通りから一転して人通りがぐつと少なくなる。道を一本隔てただけで背の高い住宅が密集している少し薄暗い道になるのだ。歩くことも随分と楽になる。

ベリエ地区から少し距離はあるものの、その分家賃が安い貸部屋が立ち並んでいる。貧乏学生や学者などが利用している。

ラスアの自宅もこの通りに面していて、バイトの前に荷物を置きに

寄っていた。ラスアの家は書店を営んでいて、彼女は休みの日や学校が終わつた後はそちらでバイトをさせてもらつている。

「やばいやばいやばーい。今日の店番だれだっけ？ 口イなら感謝。アサファとシスカはセーフで。リエナはアウト。ティーグだつたら地獄行き…！」

焦つてゐるせいで店番のシフトが思い出せない。ああ、どうかセーフでありますように、と天に祈りながら爆走する。

遅刻はしない、がお手伝いの店番からバイトに昇格したときにディグラムと約束したことだ。絶対に破るわけにはいかない。

超特急で走つていたラスアが、細い路地との交差点に差し掛かった時目の前に小さな影が飛び出した。

まずい、と思つた瞬間、どんと影と衝突した。反射的に腹へ力を入れて倒れることを何とか避ける。それと同時にどさつと何かが落ちたような音がすぐ下で聞こえ、見ればそこには十歳ほどの少女が尻餅をついていた。

「大丈夫？！」

慌ててラスアが手を差し出すと、少女はびくつと体を震わせ座り込んだまま後ずさりをした。見れば少女は体中あちこち汚れ、転んで作ったのだろう擦り傷も見られる。見上げてきた目には涙を一杯に溜まり、顔は青ざめ、体は小刻みに震え続けていた。

そのあまりの姿にもう一度、大丈夫？と手を差し伸べた時、近くから「いたか？！」「見失つた！」「どこ行きやがつた！…」など物騒な声が聞こえた。同じように声を聞いた少女の体が更に強く震え始めた。

「…あの声の人たちはお友達？」

しゃがみ込み田線を合わせて聞けば、首を取れんばかりの勢いで左右に振る。

綺麗な金色の瞳から我慢していた涙が一筋ボロリとこぼれ落ちる。纏まっていたであろう長い金髪もぐしゃぐしゃに乱れ、幼い身で必死に逃げてきたということが伝わってきた。

聞こえてきた声は、どう聞いても大人の男の声。友達にいじめられてというわけではなさそうだ。何より、随分と可愛らしい顔をしているし、着ているものも汚れてはいるが、かなり良いものだ。

良家の子供が拐かしにでもあつたか。

少なくとも追っているらしい男たちが家人や知り合いのものとは思えず、逆に危険な存在である可能性のほうが断然高い。

ラスアは危険な目にあつてゐるだらう子供を置き去りにできるほど人でなしではない。

ここであつたが運のつき

明らかに間違つた言葉の使い方をしながら、ふうつと一つ溜息をつくと震えている少女と再び目を合わせる。

「いい」であったのも何かの縁で、見捨てたら絶対目覚めが悪そうな
のよね。というわけで、匿つてあげるから一緒においで？」

につこりと微笑んで手を差し出せば、少女は元々大きな目を更に大きくしてラスアを凝視した。

その言葉に少女は追つてくる連中よりはましと考へたのかようやく

おずおずと手を差し出してくる。その手をしっかりと握り、じゃ、
いこうかとラスアは軽く引っ張るようにして少女を立ち上がりせ急
いでその場から走り去った。

春の日差しが室内に降り注ぎ、ぽかぽかと暖かい午後の時間。
ゝ踊る猫の髭ゝの三階の事務所ではソファに転がっていたロイグランが、暖かな陽気に誘われうとうと舟を漕いでいた。

ソファに横になっていても分かる引き締まった大柄な体はしなやかで草原を走る肉食獣を想像させ、無駄な筋肉は一切ない。刈り上げた黒髪は剛毛で毛先は針のように鋭く逆立っていた。髪と同じ黒い瞳は相手を切り裂きそうなほどに鋭いが、笑った顔は悪戯小僧を思わせ憎めない愛嬌があった。

(幸せだよな~)

この陽気が誘つ眠気に抗おうとはするものの、瞼は重く意志にして視界は狭まるばかり。とうとう眠りの誘惑に降参、と完全に目を閉じた瞬間、バチン!と小気味のよい音が激痛がロイグランの額を襲つた。

「いってーーー何しやがるーーー」

油断しきつていたため、まともに攻撃を食らつた。素晴らしい腹筋で体を起こしたロイグランは痛む額を押さえながら、背後に向かつて怒鳴りつけた。

ロイグランの権幕などどこ吹く風で、シスカがわざとらしく褐色の手を振つていた。

少し癖のある亞麻色の髪は両耳の前に人房ずつ残して、残りは頭上で綺麗にお団子にしてまとめている。髪と同じ亞麻色の目はやや釣り目でシャープな顔出しことに彼女の印象をきつめに表していた。

「べつに。誰かの額に蚊が止まっていたから、それを前にって軽く叩いただけよ」

「そんな見え見えの嘘を言つてんじゃねーよ。つたぐ、ちよつと寝ちまつたからつてあの起いし方はねーだらーが」

「あれくらいしないと絶対起きないじゃない、あんたは。ここは仕事場よ。どうしても寝たいんだつたら自分の部屋に行きなさこ」

シスカの言葉に反論できず、ロイグラントは「へーへー、起きますよ」と拗ねた口調で言つた。見た目に反した身軽さでソファから降りて、ぐぐ、と体を伸ばした。

「あひ、どこいくの?」

「ここにこむとまた寝ちまーいそーだからな。店番でもやつてくるわ。ここにこるつてことは、お前の仕事も一区切りついたんだろ? ここにちたのむわ」

「ま、それが正解ね。下なら少しはお客様がこるでしょ? から寝てこる暇はないでしょ」

さつさと行けと手を振るシスカに、ロイグラントはまあと大きくため息を一つつく。

口で彼女に勝てたことは一度もない。さつさと下にいく方が賢明だ、と最も賢く情けない答えを導き出した。

その時、扉の向いから、とんとんとさつとコズムよく階段を上つてくる音がした。

「お、客か?」

「いいえ、これは多分ワスアだと想つわ

ロイグラントの言葉を、シスカがすぐに否定する。言われて耳を澄ませば、確かに聞きたなれた足音が近づいていた。

「ん？ああ、ホントだ。だけど、一人じゃないみたいだな。もう一つ小さな足音がする」

「そうね。誰かしら？」

一緒にラスアのものよりも軽い足音が聞こえてくる。二人は揃つて首をかしげた。

彼らの同居人である少女のバイト先は一人がいる事務所ではなく、一階と二階にまたがる書店だった。時間的にちょうどラスアが店番に入る頃合いだ。遅刻を良しとしない彼女がこちらの事務所のに来るなど今まで一度もないことだった。

子供の存在と普段とは違うラスアの行動をいぶかしんでいると、扉の前で足音がぴたりと止まつた

「ただいまー」

キイ、と扉を開くのと同時に噂の人物が帰宅の声とともに姿を現した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4955ba/>

やるときや、やります！！

2012年1月14日22時48分発行